

* 14

インフルエンザ罹患後に副鼻腔炎から眼窩内膿瘍をきたした一例

たなか けいいちろう

田中 啓一郎・大口 泰治・古田 実・石龍 鉄樹

福島県立医科大学 眼科

【緒言】 今回我々はインフルエンザ罹患後に副鼻腔炎から眼窩内膿瘍をきたした1例を経験したので報告する。

【症例】 症例は生来健康の19歳男性。インフルエンザ罹患後9日目に著明な左眼瞼腫脹で近医を受診した。左視力は(0.4)、眼圧16mmHgと視力低下を認め紹介となった。

【経過】 初診時左眼瞼は熱感と激痛を伴い著明に腫脹し、自己開瞼不能で眼圧は34mmHgであった。眼窩部CTで左汎副鼻腔炎、眼窩骨膜下及び上直筋上の膿瘍を認めた。体温39.5°C、CRP 21、WBC 19100であった。副鼻腔炎からの眼窩内膿瘍と考え緊急で眼窩内膿瘍ドレナージ術及び内視鏡的副鼻腔根本術を施行した。術中眼球運動は全方向で制限を認めた。外眼角と眉毛下切開で排膿し骨膜下にドレーンを留置した。塗沫鏡検で連鎖球菌と嫌気性菌を認めタゾバクタム・ピペラシリンとメトロニダゾールを投与した。上眼瞼に癒痕形成し挙筋機能が消失、上転障害が残存したが他方向の眼球運動は回復、視力は1.0となった。起炎菌は *Streptococcus constellatus*、*Micromonas micros* が同定された。

【考察】 インフルエンザ罹患後に肺炎、中耳炎、副鼻腔炎、肝障害、心筋炎、脳症などを生じることがある。これらはインフルエンザウイルス関連の免疫的機序や混合感染によると考えられている。本症例はインフルエンザ罹患後の副鼻腔炎に続発した眼窩内膿瘍と考えられた。眼窩内膿瘍は不可逆的な視機能障害をきたしうるため早期の治療が必要である。